

展示記録

村岡典嗣展－日本思想史学と東北大学

会期 平成24年10月16日(水)～11月10日(日)

会場 東北大学史料館 2階企画展示室

曾根原 理

1. 企画の経緯

村岡 典嗣(むらおか つねつぐ 1884～1946)は、1924年(大正13)の東北帝国大学法文学部(現在の東北大学法・経済・文学部の前身)創設時から日本思想史研究室を主宰して、日本思想史学の学問的な確立を果たした研究者である。今回、村岡典嗣展を開催するに至った契機としては、次の二つの理由を挙げられる。

第一は、関係資料の整理の進展である。村岡典嗣が残り史料館で所蔵している文書については、2012年に358点の整理が完了し、一般公開を開始している。同年中に、村岡が晩年に信頼を寄せた門下生の梅沢 伊勢三(うめざわ いせぞう 1910～1989)の文書128点も公開され。村岡に続き、日本思想史研究室第二代教授となった竹岡勝也(たけおか かつや1893～1958)の文書79点などとあわせて、東北大学における早い時期の日本思想史学の展開が見通せる環境が整いつつあったことが、本展示開催の前提となった。

第二の契機として挙げられるのは、日本思想史学会の仙台大会の開催である。1968年(昭和43)11月17日に発足した日本思想史学会は、日本全国に700名程の会員を持ち、毎年大会を開催し機関誌『日本思想史学』を刊行するなど、日本思想史学の研究の場として発展を続けている。2013年度の大会が東北大学川内北キャンパスで開催されることから(10月19～20日)、上記の条件整備をうけて本展示を企画することになった。

大会自体は、日本思想史学会と文学研究科の共催の形をとった。一方展示の企画にあたっては、学会と史料館の共催という形をとり、学会及び東北大学日本思想史研究室関係者に種々のご支援をいただくこととなった。

展示の実務は、村岡典嗣文書研究会(佐々木 隼相/柴田 一郎/李 月珊)が分担し、日本思想史学会大会実行委員長で史料館所属教員の曾根原が支援した。

2. 展示の概要

全体を次のような6つのコーナーから構成した。

(1) 村岡典嗣について(李担当)

村岡の主要な履歴と業績を紹介する。略年譜のパネルも掲示した。

(2) 村岡と人文科学

村岡個人の研究とは別に、彼が日本の人文科学の中で果たした役割を示す目的で、当時の学術研究会議で採択された共同研究の関連資料を展示した。共同研究の背景や状況については、



本村昌文「村岡典嗣「日本国民性ノ精神史的研究」執筆の背景」(『東北大学史料館紀要』7、2012年)、同「村岡典嗣と人文科学研究費」(同前8、2013年)に教えられることが多かったことを付言する。

(3) 研究ノート(柴田担当)

村岡の学問を特徴づける方法論について、本居宣長研究やキリシタン研究および日本思想史概説のノート等を通じて紹介する。

(4) 竹岡勝也(佐々木担当)

村岡逝去の後、約10年の間を経て日本思想史研究室第2代教授となった竹岡勝也の学問について、竹岡が残した研究ノートによって紹介する。

(5) 門下生たち

村岡逝去の後、梅沢伊勢三、原田隆吉などの門下生を中心に、17回忌や没後30年の記念会が行われ、日本思想史学に限らない各分野の研究者が参加した。そうした中で村岡著作集が企画され、刊行された。記念会や著作集刊行に関わる資料を展示する。

(6) 日本思想史学会前史と東北大学

1968年に始まり現在に至る日本思想史学会は、東北大学日本思想史研究室第3代教授の石田一良(いしだ いちろう 1913～2006)を中心に成立した。その前史として、村岡が1934年に結成した「日本思想史学会」がある。関連する資料を展示する。

上記に加え、ケース一台に「日本思想史関係図書」のコーナーを設け、①村岡典嗣の著書の一部、②『日本思想史学』全バックナンバー(1～45号)、日本思想史学会奨励賞受賞者著作(河野有理『田口卯吉の夢』/昆野伸幸『近代日本の国体論：<皇国史観>再考』/小平美香『女性神職の近代－神祇儀礼・行政における祭祀者の研究』/桐原健真『吉田松陰の思想と行動－幕末日本における自他認識の転回』/船田淳一『神仏と儀礼の中世』/鈴木英之『中世学僧と神道－了誉聖岡の学問と思想』/田世民『近世日本における儒礼受容の研究』)を展示した。

なお、展示内容に即してA3用紙4枚二つ折の簡略なパンフレットを作成し、大会来場者全員に配布するとともに、来場者用も用意し自由に持ち帰ることが出来るようにした。

3. 謝辞

本展示を開催するにあたっては、日本思想史学会と東北大学大学院文学研究科日本思想史研究室の関係各位から、多大の支援をいただきました。また、日本思想史研究室卒業生で村岡研究を長く続けている池上隆史氏(藍野高等学校教諭)から、有益な助言をいただきました。

東北大学日本思想史研究室第5代教授で、日本思想史学会会長でもあった佐藤弘夫先生は、東北大学史料館長を兼ねていたため種々の調整を行い、展示実施を後援して下さいました。

展示期間中には、6-4「会計簿」に挟みこまれていた領収書に関し、笹氣信三(笹氣出版印刷専務取締役)から御教示いただくことが有りました。また、展示に使用した集合写真(末尾掲載)の人名特定について、高橋美由紀(東北福祉大学教授)および高橋博巳(金城学院大学教授)から御教示を得ました。

以上、記して感謝いたします。

展示資料目録・解説

0. 主催者あいさつ

東北大学史料館では、大学の歴史に関わる史料の収集・整理・公開を行っています。今回展示する資料の中心は、1924年（大正13）の東北帝国大学法文学部（現在の東北大学法・経済・文学部の前身）創設時から日本思想史研究室を主宰して、日本思想史学の学問的な確立を果たした村岡 典嗣（むらおか つねつぐ 1884～1946）の関係資料です。

「村岡典嗣文書」については、昨年に358点の整理が完了し、一般公開を開始しました。その後、門下生の梅沢 伊勢三（うめざわ いせぞう 1910～1989）の文書も公開することが出来、すでに公開されていた日本思想史研究室第二代教授の竹岡勝也（たけおか かつや1893～1958）の文書などとあわせて、東北大学における早い時期の日本思想史学の展開が見通せる環境が整いつつあります。

今年10月19～20日に川内北キャンパスで、日本思想史学会の全国大会が開催されることになりました。上記の条件整備をうけて本展示を企画することになり、史料館と日本思想史学会が共催の形をとらせて頂くことになりました。

今回の企画にあたっては、東北大学日本思想史研究室関係者に種々のご支援をいただきました。記して感謝申し上げます。

なお展示の実務は、村岡典嗣文書研究会（佐々木 隼相／柴田 一郎／李 月珊）が分担しました。また、日本思想史研究室卒業生の池上隆史氏から助言をいただきました。

2013年10月

東北大学史料館
日本思想史学会

1. 村岡典嗣について

村岡典嗣（1884～1946）は、戦前の思想史学者です。処女作『本居宣長』は大正文化史学の先駆、日本思想史学の基礎とされています。彼は東北帝国大学法文学部「日本思想史講座」の創設者であり、その講義はひろく方法論・通史・個別の問題（神道史・神儒仏耶交渉史・『源氏物語』・『愚管抄』・『神皇正統記』・国学・洋学など）に及び、優れた業績を今日に残しています。また、東北帝国大学において、図書館長や学内役員をつとめました。

【人物パネル】村岡典嗣

1-1. 『原著者評伝』 明治40年（1907）

20代の村岡は、独逸新教神学校において神学の講義を聴講する一方、明治40年に波多野精一と共訳でサバティエの『宗教哲学概論』を出版した。『原著者評伝』はその本の一部。

（村岡文書Ⅲ-1）

1-2. 『本居宣長』（重版） 昭和2年（1927）

『本居宣長』（岩波書店、1928年）の原稿で、『本居宣長』（警醒社、1911年）の増補版。自筆原稿と警醒社本をノートに貼り付けた校正原稿がある。増訂に当たっては主に新資料を補註し、

余論一編（「反本居学説及び宣長学の発展」）と附録四編を付け加えたことが分かる。

（村岡文書Ⅱ-11-1）

1-3. 『講義プログラム』 昭和12年（1937）～17年

村岡が東北帝国大学の外に、東京帝国大学、東京文科大学で教鞭をとった時の講義ノート。昭和12年度の講義のタイトルには「日本思想史概論」「平田学ト水戸学ノ道德思想」がある。

（村岡文書Ⅰ-65）

1-4. 東北帝国大学附属図書館図書借受証 昭和19年（1944）～20年

昭和19年（1944）4月21日から昭和20年（1945）1月17日までの東北帝国大学附属図書館の図書借受証、合計103枚。日文研旧蔵。「村岡哲」名義のカードもある。返納日は昭和22年（1947）9月18日であるが、その前年に村岡はすでに逝去した。

（村岡文書Ⅶ-11）

2. 村岡と人文科学

村岡は、自身が日本思想史の学問を追求する一方で、日本思想史という学問自体が市民権を得られるよう、各方面で努力を続けました。たとえば、戦前の学界において、多方面の専門家を集めて共同研究を実施していました。

戦前の文部省（現在の文部科学省の前身）所管の学術団体として、「学術研究会議」というものがあり、当初は国際的な学術交流事業を担っていましたが、やがて国策として日本国内の諸研究を連携・統一していく機能を果たしていきました。1943年（昭和18）以降には人文科学系の学術部が設けられ、採択された研究に対し研究費が支給され、共同研究が促進されることとなります。村岡は其中で、「民族性の比較研究」という主題のもとに、総勢22名の共同研究の中心となっていました。

現在、「人文科学の基幹としての日本思想史学」というスローガンのもとに、ともするとタコツボ化が指摘される各学問領域の垣根を越え、横断的に人文科学全体を見渡す「基幹学問」としての日本思想史学の位置づけが唱えられていますが、村岡の活動は、早くからそうした意識にもとづいていたと言えるかもしれません。

2-1. 河野 省三「神社の崇敬および祭祀の思想的・習俗的研究」昭和19年（1934）頃

「民族性ノ比較研究」のメンバーの一員による報告書（原稿用紙仮綴3冊）。要旨には、「神社の崇敬及び祭祀を中心とし、民間の神祇観念並に祭祀行事を各方面より考察」などの記述がある。河野は、国学院大学学長も務めた、当時の代表的な神道研究者。

（村岡文書Ⅵ-4）

2-2. 高橋 里美・細谷 恒夫「独逸の教育に現れた独逸民族性」昭和18年（1933）頃

「民族性ノ比較研究」のメンバー二名による「研究概要並に進行状況」。「独逸民族性の自覚形態」について、教育思想・教育政策などを通じた解明を目指し、現在「フンボルトの教育思想並びに教育政策」を探求しているとの記述がある。両者はともに東北帝国大学教授（高橋はのちに総長）で、専門は高橋が西洋哲学、細谷は教育哲学。

（村岡文書Ⅵ-9）

2-3. 石津照璽「宗教を通じてみたる東亜民族の世界観」昭和19年（1944）頃

「民族性ノ比較研究」のメンバーの一員による報告書。挟み込まれた紙片に「学研の報告の梗概、おそくなりまして誠に申訳御座いませぬ・・・10月25日 / 石津照璽 / 村岡先生」とあり、村岡に提出されたことが確認できる。石津は著名な宗教学者で、当時東北帝国大学教授、後に慶

応大学や駒沢大学の教授となった。(村岡文書VI-10)

2-4. 民族性研究室 図書目録 昭和20年(1945)頃

反古紙や原稿用紙の裏を使った質素な目録。遊紙に「村岡蔵書」の朱印と「七月七日…吉岡町へトラックにておくる、箱数十七箇也」の書入れがあり、伝来の手がかりを与えている。

(村岡文書IV-11)

3. 研究ノート

村岡が基礎を築いた日本思想史学は、その研究方法にも特色がありました。村岡は客観的・実証主義的な「科学」としての学問を主張する一方、ドイツの文献学者ベック(August Böckh 1785~1867)に依拠した上で、古典研究の本質を「認識されたことの認識」とし、日本の思想世界を歴史的に再現する学問としての日本思想史学を打ち立てました。

戦後になって村岡が残した言葉に、「これからの私の仕事は三つある。一つは本居宣長全集を完成すること、一つは仙台の吉利支丹関係の研究を完成すること、一つは日本思想史概説を完成すること」(『著作集』第4巻)とあるように、学問としての日本思想史学の確立もさることながら、村岡の宣長への情熱には生涯を通じて一貫したものがありました。また宮城県内の遺跡調査を行うなど、仙台のキリシタン研究にも多大な関心を示していたようです。

今回の展示では、それら宣長やキリシタン研究に関する資料の他に、膨大に遺された講義ノートの一部や、敗戦の原因について戦後すぐに書かれた貴重な原稿なども合わせて公開します。

3-1. 「仙台の吉利支丹について」 昭和3年(1928)

昭和3年(1928)8月に開催された仙台市文化講座における講演の草稿。前半「吉利支丹ノ概観」と後半「仙台ニ於ケル吉利支丹」の二部構成。ノートは右側の頁から書き始め、逆さにして続きが左側に書かれている。村岡が自らのライフワークとして位置づけていた仙台におけるキリシタン研究の全体像を示す史料。

(村岡文書II-14)

3-2. 「日本思想史概説」 昭和5年(1930)

昭和5年(1930)度の東北帝国大学法文学部における講義ノート。題目は「日本思想史の学問的志向とその研究方法」、「思想史の基礎学としてのPhilologie」、「神道史とその日本思想上の意義」など。この講義ノートの一部を定本として、『日本思想史概説』(『村岡典嗣著作集』第4巻)が刊行された。

(村岡文書I-23)

3-3. 本居宣長全集・原稿 昭和17年(1942)~昭和20年(1945)頃

『本居宣長全集』刊行のために用意された原稿。表題には「本居宣長随筆一」とある。村岡の編纂によって刊行された宣長の全集は計6巻のみ(岩波書店、1942~1944)で、原稿は随筆を中心に他11点残存。他に村岡教授記念論文集の内容メモ、本居宣長全集下のメモ書きがはさまれている。

(村岡文書II-33-1)

3-4. 「日本精神を論ず一敗戦の原因一」 昭和20年(1945)

敗戦後の9月12、13日に開かれた、東北帝国大学における特別講義用に準備された原稿を加筆・訂正したもの。内容は「敗戦の根本原因」、「日本精神、国民精神の定義」、「日本の国民性の長所と短所について」など。後書きには、「十一月中旬、秋田県仙北郡六郷村東根の坂本正二の家に寓して筆を執った」とある。敗戦について村岡の心境をうかがい知ることの出来る史料。

(村岡文書Ⅱ-24-2)

4. 竹岡勝也

村岡の死後、日本思想史講座を引き継いだのが竹岡勝也(1893～1958)でした。彼は、敗戦後の混乱の時期を福岡や札幌で過ごした後、1955年(昭和30)から退官までの二年間、東北大学で日本思想史講座の教授を担当しました。

竹岡がどのように敗戦を受け止めたのか、それをうかがう資料や著作は多くありません。公職追放を受け、約6年間を福岡で過ごした竹岡は、『古代史の問題』を書き上げます。出版禁止となったために世に出ませんでした。これを一つの手がかりとして敗戦後の竹岡の文化史学を考えられるのではないのでしょうか。

扱われている項目の多くは、戦前の講義ノートにも見る事が出来ますが、第二章「神道史の批判と解釈」は戦後に書かれたものと考えられます。序文で彼がいう、「歴史を再建しそして国民の信頼をこれに導く」意志は、国体観念の根拠として無批判に教育に使われてきた神道史の新たな価値を探り、取り戻す試みとなって現れます。

【人物パネル】竹岡勝也

4-1. 古代史の問題 上 昭和23年(1948)12月

序文に「昭和二十二年十二月 大宰府の神苑にて」と記された、「大宰府の問題」の決定稿。第一章「歴史意識の発生と記紀の成立」では『古事記』序、特に天武天皇が示した「削偽定実」に歴史の科学性を見出し得ることを注目する。これは、1940年までの彼の著作・講義ノートには現れない記述であり、この稿以降は記紀を論ずる際に必ず言及している。(竹岡文書Ⅱ1-1)

4-2. 古代史の問題 下 昭和23年(1948)12月

『古代史の問題』の決定稿。「古代社会と氏族」「大化新政と氏族制度」「氏神の問題」、以上の通り章立てられている。256頁。(竹岡文書Ⅱ1-2)

4-3. 古代史の問題 神話と歴史 昭和22年(1947)5月

「昭和二十二年五月 大宰府の神苑にて」と記された、定本を書き写した原稿。「神話と歴史」という副題が加えられている。また、「出版禁止となって返却されたもの、底本は山形に送った、その写しである」という記述がある。(竹岡文書Ⅱ1-3)

4-4. 神代史の批判と解釈

「古代史の問題」第二章「神代史の批判と解釈」の草稿。原稿用紙54枚。神代史はどのような操作を踏まえた上で「われわれの手」に戻り得るかを、白石、宣長、津田左右吉らによる記紀の先行研究を顧みたのち、神話と歴史を区別し、神話を古代史の所産として見なす可能性を論ずる。(竹岡文書Ⅱ2-2)

5. 門下生たち

村岡・竹岡両教授時代の東北(帝国)大学日本思想史研究室の卒業生は至って少なく、「村岡時代20余年に旧制23名、竹岡時代に入って新制9名」といわれます(『東北大学50年史』)。そうした中で、主に文化史の分野で活動した平重道や大森志郎、大学史や図書館学の分野で先駆的業績を残した原田隆吉、記紀神話の研究によって知られる梅沢伊勢三などが、代表的な門下生

といえるでしょう。また、邪馬台国論争などで知られる古田武彦も、日本思想史研究室の卒業生です。

村岡の没後、彼の遺著集を編集する動きがあらわれました。当初の計画から紆余曲折を経て、結果として著作集刊行会による『日本思想史研究』全5巻（創文社刊）の業績が残されました。その計画段階から刊行に至る経緯が、史料として残され現存しています。さらに、1962年（昭和37）の村岡17回忌にあわせて開かれた「追憶会」や、1975年（昭和50）の没後30周年記念会の記録も、今回展示いたします。

【人物パネル】梅沢伊勢三

5-1. 村岡典嗣教授追憶会 出欠葉書 昭和37年（1962）

村岡17回忌にあわせ、4月13日に東京で開催された「追憶会」の出欠を確認する葉書（合計189通）。同会の発起人には、青山なお以下綿貫哲雄まで（五十音順）、31名が名を連ねている。

（原田隆吉史料）

5-2. 和歌森太郎書簡（原田隆吉宛） 昭和37年（1962）3月16日

「追憶会」は、研究発表会が東京教育大学、追憶晚餐会が茗溪会館を会場とした。会場関係で協力したのが和歌森であつたらしく、仙台の原田との間で、参加人数や会費、講演者などの相談を行っている。

（原田隆吉史料）

5-3. 村岡先生没後三十年記念会案内 昭和50年（1975）3月15日付

逝去後30年を記念し、仙台において「記念講演会」と「追憶会」を開催することの案内。前者は梅沢伊勢三と石田一良の講演が行われ、後者は仙台駅前のホテルで開かれた。発起人として、青山なお以下和歌森太郎まで（五十音順）、14名が名を連ねている。

（原田隆吉史料）

5-4. 村岡典嗣著作集刊行会書簡 昭和50年（1975）12月10日付

第1期分5冊（創文社）の刊行が完了した後、中断していた村岡著作集第2期分の編集再開を、仙台の編集委員（石田一良／梅沢伊勢三／原田隆吉／玉懸博之）から監修者および編集委員に告げる書簡。全6冊を計画していたことが確認できるが、結局未刊のまま現在に至っている。

（原田隆吉史料）

6. 日本思想史学会前史と東北大学

現在、毎年大会を開き学会誌『日本思想史学』を発行している日本思想史学会は、1968年（昭和43）に東北大学日本思想史研究室第3代教授の石田一良を中心に始まったものですが、その源流は戦前にさかのぼります。

1934年（昭和9）に村岡を中心とする「日本思想史学会」がいったん結成されていましたが、村岡の逝去と戦後の混乱のため、自然解体の形となりました。その後、数年の間を経て着任し、日本思想史研究室第2代教授となった竹岡が、「日本思想史研究会」を始めました。規模や人数の点では不十分ともいえますが、将来を見すえ、日本思想史学の展開をはかった視点は、現在の我々も学ぶべき点があるかもしれません。

現在につながる先人の活動として、記憶にとどめておきたいものです。

6-1. 学会記録 一 昭和9年(1934)～13年

村岡教授宅において開催された創立打ち合わせ会をはじめ、例会、読書会など各種会合の実施記録。「会規」および入会受付の葉書が挟み込まれていた。(日本思想史学会関係文書1)

6-2. 会員名簿 一 昭和9年(1934)～10年

入会申込書を貼り付けて会員名簿の機能を持たせている。昭和9年(1934)4月18日の村岡自身の「申込書」に始まり、翌年12月1日の吉田三郎に至る33名分。

(日本思想史学会関係文書2)

6-3. 会報送付先一覧 昭和9年(1934)～18年頃

会報1～4号の頒布先人名のリストと、関係する住所録。「雑誌出版届」の書式を挟み込む。

(日本思想史学会関係文書3)

6-4. 会計簿 昭和9年(1934)度～11年度

各年度の会計帳簿。日本思想史学会報第4号別刷の領収書が、該当箇所には挟み込まれていた。

(日本思想史学会関係文書4)

6-5. 日本思想史学会 郵便貯金通帳 昭和12年(1937)3月～6月

仙台貯金支局に開設された日本思想史学会の通帳。

(日本思想史学会関係文書5)



村岡没後30年記念会 (1975年4月19日)

第三列：(左から) 八重樫直比古・田代和久・(不明2名)・玉懸博之・高橋博巳・原田隆吉・高橋美由紀
 第二列：曾我部静雄・北住敏夫・(不明)・大内三郎・永野為武・伊東信雄・(不明)・梅沢伊勢三・(不明)
 第一列：(6名不明)・石田一良・(不明)